



社会学史はいかにして可能か : 今日におけるその可能性と課題

梅村, 麦生

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 51:25*-56*

(Issue Date)

2024

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487334>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487334>



社会学史はいかにして可能か

——今日におけるその可能性と課題——

梅 村 麦 生

「社會學史は、社會學研究の補ひともなり又たその緒論ともなるものである。歴史的発展のあとを辿ることによつて科學の形相を明かにする便宜のあることは、他の學問についても當て嵌まることであるが、特に社會學に於いてその必要が痛切である。といふのは、社會學が生れて未だ年月が經つてゐないせいか、その體系について學者の間に意見の合致してゐる部分が極めて僅かであつて、我々は一體何が社會學であるかと疑惑を抱かされる場合があるからである。種々の體系の間に或る連絡をつけなくては、我々は唯だ社會學のなかに個々の學者の雜多な見解の群居してゐるのを見るだけであつて、つひに社會學なるものについて明瞭な觀念を持つことができないのである。我々は種々の見解の間に一定の秩序を設けなければならぬ。しかも、かうした秩序は歴史的に種々の學說の生れて來た跡を辿ることによつて最もよく理解されるものである。社會學史が社會學の研究にとつて重要であることは言ふを俟たぬ」（新明1926: 1）

はじめに

今日の社会学のなかで、その下位分野としての社会学史の意義があらためて問い直されている（参照、Moebius und Ploder 2018；メビウス2021；佐藤2023）¹。社会学における社会学史の意義は、冒頭に引いた新明正道のように、

1 「これまでの社会学の歴史を振り返り、これまで「社会学」という学問領域がどのようなものとして提起され、理解され、また使われてきたのかを検討することは、単

早くから主張されてきた²。その理由の一つとして、社会学とは近代社会の自己反省の学であるとの認識があり、そこからいわば近代社会の自己像の変遷の歴史として、社会学の歴史が捉えられてきたことが挙げられる³。そうした認識を

に社会学史研究における知見を高めるだけでなく、今日「社会学」を研究することの意味について考えてみる一つの機会になることが期待できるであろう」（佐藤 2023: 4）。ただし、本稿の記述はドイツ語圏の社会学者や、その学説に依拠する日本の社会学者の議論に多くを負っているため、社会学史の位置づけと現状について、他言語・他国の状況を十分に反映できていない可能性がある。

- 2 「社会学に対する要望は年とともに高まりつつある。……しかしそのためには、多岐にわたった社会学の歴史をもう一度ふりかえってみることが必要である。他の社会語科学以上に、社会学の研究は社会学史と密接に結びついているのである。われわれが微力ながら本書を企画するにいたったのも、以上の理由によるのであつた」（阿閉・内藤 1952: 1）。
- 3 日本で 1950 年代に刊行された社会学史を概説するテキストのなかでも、おそらく後述のフライヤーやマンハイムの説を受けて、例えば新明や阿閉吉男といった著者が、以下のように記している。「社会学は科学として一定の形式的な学問的構成を必要とされているものの、これが社会を研究するにあたって内容的に社会によって存在的制約を受けることは不可避である。……社会学はそれ自身近代社会の自己意識をなしているが、これが近代社会の自己意識として具體的にいかなる歴史的性格をもつようになるかということは、究極においてこれが内容的にいかなる社会思想と結びついているかということによって照明される……」（新明 1954: 3-4）。「社会学は、近代市民社会の危機的段階になって成立した新しい学問であって、それは、ほかならぬ近代市民社会の科学的自己意識なのである。……社会学史にとって重要なことは、それぞれの社会学説を社会的存在との関連において把握し、それらをイデオロギーとして捉えることである。……それぞれの社会学説はその社会的存在を反映するものであるから、それらはその社会的存在のイデオロギーとして捉えられなければならない」（阿閉 1952: 2, 4-5）。また新明（1954: 16）はフライヤーのこの二つの著作を、社会学史の範例になるものと記している。ところでフライヤーは、「社会」が矛盾と運動をうちに含み歴史的变化を被るものであるという見解を、サン＝シモン、オーギュスト・コント、ローレンツ・フォン・シュタイン、カール・マルクスらの「ヨーロッパ社会学のあらゆる古典的体系」に共通の思想であるとしたうえで、その先駆にヘーゲルの歴史哲学を置いている（Freyer 1930: 10-11=1944: 13-14）。「ところでヘーゲルの場合、こうした意志形式のうちで自由の真の段階として、そしてもちろん体系のなかで一定の位置価値をとまなつて現われるのが市民社会（die bürgerliche Gesellschaft）である。このことこそ、ヘーゲルの法哲学をドイツ社会学の哲学的起源たらしめるものである」（Freyer 1931a: 63=1952: 88）。むろんフライヤーのこうした主張は単独で現われたものではなく、その主張をとりまく当時の文脈、特にパウロ・バルト、ヴェルナー・ゾンバルト、カール・ブリンクマン、フランツ・オッペンハイマー、オトマール・シュパン、レオポルト・フォン・ヴィーゼらによる「社会学の起源」に関するドイツ語圏での議論がある。同時代やそれ以降の日本の受容の一端として、五十嵐（1928: 177-192）、新明（1932: 185-202）、清水（1933: 1-50）、森（1969: 1-8）なども参照のこと。そしてフライヤーと言えば、「市民社会の戦いの場に新たな前線が形成されている。それはつまり、右からの革命である」に始まる『右からの革命』（Freyer 1931b）などの政治的著作を記した保守派の社会学者として、ナチ体制下でも社会学者として

より早い段階で定式化したものとして、ハンス・フライヤーは『現実科学としての社会学』と『社会学入門』のなかで以下のように記している。

……社会学とは、社会という現実の科学的な自己意識である (Eine Soziologie … ist das wissenschaftliche Selbstbewußtsein einer gesellschaftlichen Wirklichkeit.)。さらに社会学の問題状況と思想の内的形式は、自らの歴史によって不可避的に決定的な影響を受けている。(Freyer 1930: 5=1944: 7)

社会学的思考は、単に現在の社会現実 (die gesellschaftliche Wirklichkeit der Gegenwart) にのみ関わるのではない。……しかしわれわれは一定の社会形象 (gesellschaftliche Gebilden) に、つまり現在の社会形象に、特有の仕方、すなわち *実存的* (existenziell) に結びついている。つまり現在の社会形象とは、まさにわれわれ自身に他ならないのである。……いかなる社会秩序 (Gesellschaftsordnung) も、弁証法的に築かれている。しかし現在の出来事の弁証法のなかでは、われわれ自身が当事者 (Partei) であり、活動力である。われわれを通して社会の出来事が生じていく。そして現在の社会秩序の理論的認識はいずれも、その認識の対象を現実として捉えようとするならば、進行中の運動、すなわち私たち自身の意志と行動を反省しなければならない。ここで社会学は一つの実在の科学的な自己意識 (das wissenschaftlichen Selbstbewußtsein einer Realität) となり、一つの実存の理論 (die Theorie einer Existenz) となる。(Freyer 1931a: 10-11=1952: 9)

地位を保つのみならず、「民族共同体」等のイデオロギーにも親和的だったとして、戦後とりわけ没後に批判の対象となっている。そのフライヤーの思想とナチ時代の活動、また彼に学んだアルノルト・ゲーレンやヘルムート・シェルスキーらとの「ライプツィヒ学派」の系譜などについては、Muller (1987)、宮武 (2001)、Schauer (2018)、Klingemann (2020: 241-251) などを参照のこと。

ヨーロッパ社会学は、高度資本主義の階級社会についての科学として、つまり現在のヨーロッパのそうした社会秩序の構造、起源、運動法則、発展傾向についての科学として構築されてきた。……社会学的思考は、市民革命の精神的相関物である。(Freyer 1930: 8=1944: 11-12)

このような〈近代社会の自己反省の学〉としての社会学⁴、その自己反省の歴史としての社会学史という認識は、今日に受け継がれている⁵。

そうであるとする、先に引用したフライヤーや、またカール・マンハイムが「知識の存在被拘束性」について説いたように、他ならぬ社会学と社会学史もまた、社会のなかでの学的知識に属するものとして、その社会、その時代の制約を受けているものと考えなければならない⁶。

4 ただし、上記引用部冒頭でフライヤーは「社会学」と「社会という現実」の原語にどちらも不定冠詞eine (一つの／ある)を付しているように、〈イギリスの社会的現実〉に応じた〈イギリス社会学〉、〈ドイツの社会的現実〉に応じた〈ドイツ社会学〉、〈アメリカの社会的現実〉に応じた〈アメリカ社会学〉……といった、国ごと、地域ごとの社会学を想定している。それぞれの国や地域で「社会」が問題として浮上して来るとともに、それぞれ多かれ少なかれ特色をもった「社会学」が現われ出てきた、と。「ドイツ社会学 (die deutsche Soziologie) ……とは実のところ、ドイツの現実の自己意識 (das Selbstbewußtsein der deutschen Wirklichkeit) である」(Freyer 1935: 127-128)。また清水 (1933: 3-4) のように、史的唯物論に基づく社会理論の観点から、既存の社会学はあくまでブルジョワジー＝資本家階級の社会理論であり、社会全体を代表するものではないと見なす「社会学批判」も、当時すでにおこなわれている。

5 「『モダニズム』とはあえていうなら、近代の『自己意識』です。……社会学とは、いわばこういう『自己意識』の所産ではないか。これからのお話はつまりは、そういうことです。……おおかたの近代社会科学は、「近代とは何か」を問わないで、ただ近代の中にいるだけであるのに対して、社会学は近代の中にいながら、同時にその自分の居場所としての「近代」とは何かを問う、ひねくれた意識の産物であるというわけですね」(稲葉 2009: 115-118)。「私の言葉でポイントを言えば、社会学は、「近代社会の自己意識の一つの表現」なのです。近代社会というものの特徴は、比喩的な言い方をすれば、「自己意識をもつ社会」です。……その自己意識の一つの表現が、広く見れば社会科学、その中でも社会学という学問なのです。だから、自己意識をもつ社会の中にしか、社会学は生まれません。……つまり、社会現象を説明するのが社会学だとすれば、社会学そのものも社会学の対象になる。したがって、社会学の歴史は、それ自体が一つの社会学になるのです」(大澤 2019: 3-5)。稲葉や大澤のこの議論は、後述のルーマンの学説を踏まえたものと思われる。

6 そのマンハイムも、1918年から1933年までのドイツ社会学について、イギリスへの亡命まもない時期に刊行された論考のなかで「[その時期の]ドイツ社会学は巨大

そして近年の社会学史への注目に関しては、とりわけドイツ語圏の社会学史のなかで、「社会学の再帰的転回 (eine reflexive Wendung der Soziologie)」という流れが指摘されている (Poferl und Keller 2017: 82ほか)⁷。つまり、近代社会そのものに対して、その社会の変化を陰に陽に受けて、ポストモダニズムや「第二の近代」論、後期近代化論や再帰的近代化論が現れてきたように、社会学とその歴史に対する見方もまた、反省的に捉え直されるようになった⁸。特に近代社会のあり方や近代化の過程がもはや単一のものでも単線的なものでもない⁹と見なされていったように、「単一の社会学 (Die Soziologie)」は存在せず、

な社会的崩壊と再建の産物の一つであり、高度な形態の自己意識と自己批判とによって成し遂げられた」と要約している (Mannheim 1934: 13 = 1976: 237)。またマンハイムは、「社会的」という概念に即して以下のようにも記している。「概念の欠如は、単に視点の欠如だけでなく、生との対決における一定の種類の力学が欠如していることを意味する。つまり例えば、「社会的」(sozial) という概念がかなり遅く歴史に登場したのは、体験の対象がそのような方向においてまだ問題とされず、したがって同時にまた、一定の体験様式が存在していなかったということを示すものである」(Mannheim 1931: 663 = 1969: 210-211 cf. 森 1969: 2-3)。

7 この流れのなかで社会学史は、「社会学の知識社会学」のうちにも位置づけられ (Srubar 2015)、「社会学的社会学史 (soziologische Geschichte der Soziologie)」という表現も用いられている (Fleck 1999; cf. Moebius und Ploder 2018: 2)。したがって、それぞれの論者による主張の異同は小さくないものの、アーヴィン・ゲルドナーやピエール・ブルデュールらが提唱した「再帰的=反省的社会学 (reflexive sociology)」「社会学的社会学」などの延長線上に位置づけることができる (参照、磯 2020: 16-19)。もとより、ピティリム・A・ソローキンが『現代社会学理論』のなかで、社会学成立期以来の諸理論の併存状態に関して、「社会現象の複雑な性質はむしろ多様な研究アプローチと研究方法を必要とする」(Sorokin 1928: 757) と記していたが、エドガール・モラン (Morin 1984: 特に27-28, 44) はさらに、「社会学的社会学」が論理学における自己言及の「パラドクス」と同様に困難な試みであるとしつつ、そこでは他の社会領域や文化との比較を踏まえた「反省」や「自己距離化」そして「相対的な自律性」が求められており、「社会学」そのものが「複雑」になることで初めて可能になるものであるとしている。「相対的自律性」に関しては、社会学内での社会学史の下位分化、ということも考えられるかもしれない (下記の註20も参照のこと)。しかしいづれにしても、「社会学的社会学」にかぎらず、社会学そのものが「社会のなかで…社会を記述する」試みとしてもより「自己言及的」なものである、というのが後述のルーマンの見解である (Luhmann 1997: 16-17=2009: 1-2)。

8 註3でフライヤーに関して述べたように、例えばドイツ語圏の社会学史では「ナチズムによってドイツの社会学は破壊された」という「神話」のもと、「ドイツ社会学史の記述における忘れられた12年」(Schauer 2018: 117-118) となっていたナチ時代の社会学史は、特に1980年代以降さかんに再考がなされるようになっており、ナチ時代とその前後のドイツ社会学の「連続性と非連続性をめぐる論争」(Moebius 2017: 15=2018: 137) がなお続いている。その画期をなした企画として、Lepsius編 (1981) も参照のこと。

あるのはただ「さまざまな社会学 (Soziologien)」⁹ だけだ、という考えも少なからず受け入れられていくなかで、それでもなおそうした異質な理論と研究方法、多様な主題と研究対象を内包する一つのディシプリンとして、いかに社会学が成り立っているのか、あるいは成り立ちうるのが、社会学史の課題に位置づけられている⁹。

現に例えば、セクシュアリティ研究者のケン・プラマーによる社会学の入門テキストでは、このように記されている¹⁰。

社会について考えるという営み自体のはじまりはかなり昔まで遡ることができる。もっとも、近代欧米社会学は啓蒙主義と産業革命の賜物であり、「プロフェッショナル専門分野としての形」をとりはじめたのは200年ほど前である。……社会と同じく社会学は、絶えざる変化の中にある。近年の社会的傾向（デジタルイズムなど）や批判的傾向（多文化主義、フェミニズム、クィア理論など）は、社会学という学問領域を変化させつつある。近年の世界は数々の発展を遂げ、（過去にはヨーロッパとアメリカ合衆国に支配されていた）「欧米」社会学の多くの部分にいっそう難題が突きつけられている。近い将来、すべての国や地域、集団に対して適切な関心が向けられ、こうした歴史が再構成されるときが訪れると予測することは可能である。（Plummer [2010] 2016: 120=2021: 215-216）。

9 同様の議論は、後述のシュメール・N・アイゼンシュタットらによる「多元的近代 (multiple modernities)」論とその批判的検討のなかでもおこなわれている。

10 以下の引用箇所の前後では、さらにこのように記されている。「社会学は（常にそうであったように）まとまりのない学問領域である。これが様変わりすることはほとんどありえない。よく見ると、何百もの理論や方法や関心領域が存在する。教科書はこれを単純化していくつかの学派に集約しようとする。だが、本当に重要なのは、社会学はきわめて見通しの悪い領域であるということだ。少なくとも、社会学には複数のパラダイムが並存している（マルチパラダイムの）と言うことはできる。……とはいえ、その多様性と声の複数性にもかかわらず、何が社会学にまとまりをもたせるかといえば、結局のところ、社会的なるものの意義についての共通した批判意識である。社会学は想像力であり、思考様式であり、批判意識である。だからこそ、社会学はたえず世界のいたるところで必要とされるのである」（Plummer [2010] 2016: 120=2021: 211-216）。

そこで本稿では、そうした現代の社会学にあって、なお社会学史が可能であるとすれば、それはどのようなものでありうるか、つまり今日に〈社会学史はいかにして可能か〉ということ、を、主題とする。

1 社会学史の前提——歴史はいかにして可能か

〈社会学史はいかにして可能か〉を考える場合、そもそもその研究対象となる社会学という学問分野がいかにして可能であるのかと、さらにはその学問分野の歴史を記述することがいかにして可能になるのかということが、その前提として問われうる。

そして後述のように、社会学という学問分野の可能性を問ううえで、「社会学はいかにして可能か」という問いに基づいて応えようと試みた先駆として、ゲオルク・ジンメルによる論考がある (Simmel [1908] 1923=2016)。そこでジンメルは、「自然はいかにして可能か」というカントによる認識論的問題を社会に即して問うているのであるが、社会学史はいかにして可能かを考えるうえで重要であるのは、同じジンメルが歴史哲学の課題として問うた「歴史はいかにして可能か」の問題である (Simmel [1892] 1922=2004)。

そのとき特に問題となるのは、ジンメルが後年に「歴史的時間の問題」として論じているように、歴史記述の方法論的問題の根底にある、「出来事がいかにして歴史となるのか (wie wird aus dem Geschehen Geschichte?)」という問いである (Simmel 1916: 30=2004: 252)。つまり、「生じたこと (das Geschehen)」すべてが「歴史 (Geschichte)」になるわけではない以上、そこでは何らかの仕方での選択がおこなわれており、またおこなわれなければならない。ジンメルは、「出来事を現実にあつたとおりに模写しようとする歴史的実在論」も「現実と現実の認識とを同一視する観念論」もひとしく一面的に事態を歪めるものであって「前者は内容を失い」、「後者は内容の持つ連続性を失う」としたうえで、歴史的認識は (1) 歴史的な出来事理解と (2) その時系列上への位置づけ、つまり (1) 何らかの事象の内容を「理解」し、一つの歴

史的な出来事の単位として画定すること、(2) そうした歴史的な出来事を他の歴史的な出来事との先後関係に基づき時系列上に位置づけること、この二つの原理の往還によって可能になっている、と結論づけている (Simmel 1916: 20-31=2004: 243-252) ¹¹。

ジンメルはそこに「生」と「生の対立物」かつ「生の一形式」としての「歴史」との弁証法を見出しているが (cf. Troeltsch 1917: 344 ; 梅村 2020: 105, 注 13) ¹²、そうしたジンメルの議論から想起されるのは、一定の〈理念〉や〈法則〉をもとに歴史の展開を描き、そのなかでさまざまな歴史的な出来事を選択や、歴史的時間=時代の画定をおこなっていた、ヘーゲルの歴史哲学やカール・マルクスらの史的唯物論である ¹³。

世界史とは自由の意識が進歩していく過程であり、わたしたちはその過程の必然性を認識しなければなりません。(Hegel [1837] 1928: 46 = 1994: 41)

今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。(Marx und Engels [1848] 1932: 525=1951 : 40)

こうした「目的論的」な歴史観については、カール・R・ポパーが『歴史主義の貧困』や『開かれた社会とその敵』のなかでヘーゲルやマルクスの歴史哲学や社会理論を「歴史主義」という名のもとで批判したように ¹⁴、歴史を導く〈理念〉

11 ジンメルのこの論考に含まれる、歴史(学)的な時間概念の多元性という問題に関しては、Koselleck (1979) や梅村 (2020) などを参照のこと。

12 ハンス＝ゲオルク・ガダマーが用いた言葉を借りれば、歴史記述ないし歴史的時間における〈解釈学的循環〉とも言える。

13 ジンメルの場合、ヘーゲルやマルクスのそうした構想をそのまま継いでいるわけではないが、「アプリアリ」や「生の弁証法」——二元的な対立をあくまで滅却しない原理として——がそれに相当すると考えられる (cf. 廳 2010)。

14 「歴史は如何なる目的も持たないにせよ、われわれは歴史にこのようなわれわれの諸目的を課することができる。歴史は如何なる意味も持たないとはいえ、われわれは歴史に意味を与えることができる。……歴史は進歩するとか、われわれは必然的に進歩してゆく、と考えられるならば、われわれは、歴史は意味を持っているし、その意味

や〈法則〉といった考えは今日容易に受け入れられるものではない。そして今日の社会学史においても、「社会学が発生し、発展するのは当然のことであり、必然的なことであるとみなし、社会学の歴史が一本の太い系譜でつながっていると捉えるような目的論的な歴史観……の陥る危険性」が認識され、「目的論的な社会学史観からの脱却」が目指されている（佐藤2023: 11）。しかしそれでも、「生きた歴史とは、つねに現在=同時代の歴史である」（Croce 1920=1952）、「歴史とは、現在と過去とのたえざる対話である」（Carr [1961] 1987=2022）と言われてきたように、いまこの地点からいかにして、いかなる視点のもとで社会学史を記述するのかは、なお問われてしかるべき問題である。

2 社会学史の課題——何のための社会学史か

もう一つ重要な問いとして、社会学史の研究は、〈それ自体が目的〉であるという可能性を超えて——つまり、社会における科学の分出と同じように、社会学における社会学史の発展においても、〈それ自体が目的〉となることは必要な段階であるかもしれないとはいえ——社会学やそれ以外の領域に対して、一体どのような寄与がありうるか。

一般に何らかの学問分野における学史と言えば、当該分野のこれまでの歴史を描くことで、その分野の存在意義を示し、いわば正当化する機能を果たそうとしてきた、と見ることもできる。しかしそれだけだと反対に、ロバート・K・マートンが『社会理論と社会構造』の冒頭で、アルフレッド・N・ホワイトヘッド（Whitehead 1917: 114）の「自らの創設者を忘れかねている科学は、もうおしまいである（A science which hesitates to forget its founders is lost）」と

は歴史の中に発見されるのであって与えられる必要はないのだ、と信じている人々と同列の誤りを犯すことになる。なぜなら、進歩とは、ある種の目的に向かって、すなわち、人間存在としてのわれわれにとって実在している目的に向かって、運動していくことだからである。「歴史」とは、そうしたことをなしえはしない。われわれのみが、人間としての諸個人（the human individuals）のみが、それをなすのである」（Popper [1950] 1963: 278-280=1980: 258-259）。

いう一節を引いて警告しているように¹⁵、学説史上の意義を理論そのものの意義と取り違えること、つまり過去の社会学者や社会学理論の歴史的な意義を、そのまま今日的な意義へとすり替えてしまう可能性がある（Merton [1949] 1957: 4-5=1961: 2-3）。この点は、先に述べた「目的論的な社会学史観」の問題とも通じている。あるいは、社会学史を記述する目的の一つに、それを通して社会学の「専門分野としての同一性（disziplinäre Identität）」を描き出すことがあったとして（cf. Lepenies 1981）、そもそも社会学それ自体が断片化し、専門分野としての同一性を容易に見込めなくなっている（Dayé und Moebius 2015: 8）。さらにホワイトヘッドはマートンによる先の引用箇所の前後で、「科学」にとって本質的に重要な「論理的」であるために、「古典的著者」の「権威に対する崇拜」は、むしろ妨げになりうるものである、と付け加えていた（Whitehead 1917: 114-115）¹⁶。

そうした問題も踏まえたくうえで、あらためて何のための社会学史かを考える手がかりとして、比較的近年の社会学史テキストの著者フォルカー・クルーゼは、社会学史の課題として以下の三つを挙げている（Kruse 2012: 17）。

（1）社会学の発展をそのつどの歴史的文脈のもとで理解すること

15 マートンがそこで「実際に役に立つ社会学の理論」として重視したのは、「現在の社会的問題の分析」に資する、調査研究に活かすことのできる理論であり、その習熟のためには初期の社会学理論の蓄積を顧慮することがむしろ妨げとなる、と見ている（Merton [1949] 1957: 4-5=1961: 2-3）。

16 むろんそのホワイトヘッドも『過程と实在』のなかで、「ヨーロッパ哲学の伝統……は、プラトンに対する一連の脚注から成り立っている」と記していたように、過去の学術的知見とその現代的意義そのものを否定するものではない。しかしそこでも、プラトンの著作が重要であるのは普遍的なアイデアがそこから豊富に引き出されてきたからであり、プラトンを含む古典的著者の学説を引き合いに出すことはあっても、そこで科学や哲学の命題として重要なのはあくまで合理的な説明可能性であり、「巨匠」の「権威」に恃むところは何もない、と記している（Whitehead [1929] 1978: 39=1981: 57-58）。ところで後述のクリスティアン・フレックも社会学史方法論の論考のなかでマートンによるホワイトヘッドのこの章句の引用に言及し、マートンがこの章句によって何を伝えたかったかは社会学史家のあいだで見解が分かれるところだが、おそらくホワイトヘッドが意図したものとは異なるであろう、と付言している（Fleck 2015: 37-38, Anm.1）。

- (2) これまで利用されてこなかった学術的、特に理論的な潜在力を明らかにすること
- (3) 社会学の「古典的」な知識在庫を、他の諸学問や知的公共圏に向けても伝えていくこと

これらの各点は、いずれも社会のなかの社会学という位置づけを考慮したものと言えるが、「社会学の再帰的転回」を経た今日の社会学史にとってより重要なことは、以上の三つの点が交わる場所、つまりこの分野のいわば歴史的偶有性、別様のあり方がありえたことを明らかにしつつ¹⁷、過去からの発掘であれ未来への構築であれ、オルタナティブな可能性を探索することのうちにある。

殊に、「はじめ」にて引いたプラマーがそのテキストのなかで示しているように、いわばオルタナティブな社会学の可能性と結びつくオルタナティブな社会学史の試みは、すでに種々なされている。その目立った成果としては、いわゆる「西洋白人男性」（さらに言えば、主にキリスト教徒、ときにユダヤ教徒）の視点（cf. Plummer [2010] 2016: 118=2021: 212-213）を中心に描かれてきた従来の社会学史への批判、反省を内包する、ポストコロニアリズム社会学史、女性社会学史／フェミニズム社会学史、黒人社会学史などの試みがある（cf. Bhabra 2007=2013；Plummer [2010] 2016: 97-122=2021: 175-219；奥村2023: 227-288）¹⁸。また別の例として、同じく従来の社会学史が（合）理性や知識をめ

17 後述のように、社会学史の研究対象として人物を焦点とする研究は最もポピュラーなものと考えられるが、そこで取り上げられる人物に関しても、ニクラス・ルーマンが後述する論考のなかでこのように記している。「特殊社会学的な学科の伝統が成立するということからしてすでに、あるいは過去の人間を学科の伝統として、学科の古典的著述家として取り扱うことからしてすでに、アカデミックな分出と相関しているのではないか……。古典的著述家のアカデミックな立場が《偶然的》なものであったことを想起されたい。デュルケームは教育学。ヴェーバーは休職状態だった。ジンメルはユダヤ人であったがゆえに職に就けなかったのである」（Luhmann 1981: 266=2013: 410）。言うなれば〈創設の父たち〉という神話は、この分野が創設されたあとではじめて、遡及的に創設されたものではないか、と。

18 さらにプラマーも記しているように、フェミニズムに話をかぎっても「複数形のフェミニズム（feminisms）」や黒人フェミニズム思想史の展開がある。

ぐる理論・学説に傾斜してきたという批判をもとに、「感情」をめぐる社会学理論・学説の展開を再構築しようとする感情社会学史の試みも現われている (cf. Turner and Stets 2005=2013; 船津編 2006; Cerulo and Scribano 編 2022)。

それに加えて今日における社会学史の展開の可能性については、社会学内部の発展にとどまらず、関連する諸分野における学史研究や科学史、さらには社会史や歴史学の発展による寄与がありうる。かねてより上述のマートン (Merton 1967: 3-4) は、自然科学や生命科学の科学史研究が、知識社会的な科学社会学の手法を取り入れるようになったのに対して¹⁹、社会学者による学説史研究は一連の「成功した理論体系」の要約紹介にとどまっていると指摘していたが、近年刊行された『ドイツ語圏の社会学史便覧』の編者らは、1980年代以降の社会学史への関心の高まりや上述の「社会学の再帰的転回」に関して、トマス・クーン (Kuhn 1962=1971) 以降の科学史の興隆や、科学技術社会論のなかで「社会科学の社会的研究 (Social Studies of Social Science)」の名の下で社会科学を対象とする研究が進められていることとの関わりを指摘している (Moebius und Ploder 2018: 2-4)²⁰。また社会学史研究上で一つの画期をなしたと言える、後述のロバート・ニスバットによる社会学史は、アーサー・O・ラヴジョイの観念史 (Lovejoy 1936=2013) やエリック・ホブズボームの社会思想史 (Hobsbawm 1962=1968) を重要な礎石としており、またタルコット・パーソンズの『社会的行為の構造』における行為理論の収斂テーゼの枠組みも、ヨーゼフ・シュンペーターの経済学史 (Schumpeter 1914=1980) にそ

19 科学史家の古川安は、自然科学の科学史が従来取り組んできた「内的歴史」(概念・理論の歴史)に加えて、人びとが科学を实践してきたなかでの「外的歴史」として、科学と社会の相互作用、科学の社会的側面・文化的側面の歴史を研究する「科学の社会史」の意義を述べている (古川 [1989 2018: 5])。

20 自然科学の科学史研究の枠組みを、人文社会科学に応用する構想の一例として、Latour ([1984] 2001=2023)、隠岐 (2018)などを参照のこと。またFleck (2015: 40-41)は、特に学史の「制度化」という面而言えば、人文社会科学のなかでは哲学史、経済学史、心理学史などが先行しており、それらの分野に比べると社会学史では制度化がさほど進んでいない、と指摘している。

の先駆が見られる²¹。社会学が「マルチパラダイムの」²²であると言われてきたのも、当然ながらクーンによる科学のパラダイム論を踏まえてのことである。そして現代に近づくにしたがって、それぞれの国民国家の枠組みにとどまる一国社会学（史）の限界や、近代化の過程を西洋各国を単一のモデルとして論じることへの批判は、グローバル化論や「多元的近代（multiple modernities）」論（cf. Eisenstadt 2000; Sachsenmaier and Riedel編2002）、あるいはウルリッヒ・ベック（Beck 1997: 49-55=2005: 50-57）の言う「社会のコンテナ理論」批判などを筆頭に、社会学でもさかんに積み重ねられてきたが、ポストコロニアリズム社会学の構想はガルミンダ・バンブラ（Bhambra 2007=2013）の研究に見られるように、当然ながらエドワード・W・サイードのオリエンタリズム論やガヤトリ・C・スピヴァクのサバルタン論などの文化理論や、またイマヌエル・ウォーラーズテインの世界システム論や、あるいはサンジャイ・スブラフマニヤムの『接続された歴史』（Subrahmanyam 2005=2009）など、グローバル・ヒストリーの発展を踏まえている。

3 社会学史の構成要素——何をいかに記述するか

現今の社会学史の課題を踏まえて、具体的に社会学史を記述するうえで問題となるのは、何をどのように記述するのかという、方法論の問題である。

21 ちなみにパーソンズはシュンペーターのこの論考を（ただし、原論文とタイトルの一部に相違がある）、『社会的行為の構造』のアルフレッド・マーシャル章の冒頭で参照している（Parsons [1937] 1968: 129=1986: 3）。

22 ヨアヒム・フィーシャーによる、ドイツ語圏における「社会学理論のマルチパラダイム状況」の説明について、森川（2020: 13）は以下のようにまとめている。「簡単な言葉にまとめると、社会的なもののそれ自身が高度な複雑性を持っているのである。社会学における理論産出も理論比較も、脱中心化された相互主観的な社会的な現象であり、相互主観性の論理に従う。したがって、一つの正しい地点、正しい理論は規定できないことになる」。関連して、本稿の註7も見られたい。ただし森川のその論考では、ドイツ語圏の社会学界で生じた「社会学アカデミー（Akademie für Soziologie）独立問題」という、数理社会学者・計量社会学者らによる、いわば「マルチパラダイム平和を破」ろうする試みを紹介する前段で、マルチパラダイム状況に関する言説が取り上げられている。詳しくは森川の同論考を参照のこと。

さまざまな方法で記述されてきた社会学史の方法論について、それを分類や体系化しようという試みが、近年あらためておこなわれている。例えば佐藤成基は、社会学史のアプローチを以下の二つに大別し、分類上の見取り図を与えている（佐藤 2023: 4）。

- (1) 「学説史的なアプローチ」: 社会学の理論学説の論理構成や妥当性を、その理論学説が形成され、変化していく過程をその歴史的な文脈と関連づけていくことで、内在的に問う。
- (2) 「制度的なアプローチ」: 社会学の学問領域を構成する制度/人的ネットワークの歴史を問う。

佐藤はここで、社会学史にとってのどちらのアプローチも不可欠であるが、より本流にあるのが学説史的なアプローチであるとしている（佐藤 2023: 4）。

その佐藤が言う「学説史的なアプローチ」が対象とする「社会学の理論学説」²³についても、それ単独で意義をもつわけではない以上、特定の理論学説に焦点を当てたとしても、あくまで他の理論学説との連関のなかでの意義や、理論学説外の諸環境との関係も射程に入ってくる。また反対に、特定の理論学説といえども、必ずしも完結した不可分の単位ではなく、その理論学説を構成する一

23 ここでの本題ではないが、日本語の社会学の文脈では「理論」と「学説」の異同や、さらには「社会学説」と「社会学学説」の異同も、一つの論点になりうる。また日本語に限らず、社会学という学問分野の位置づけ——とりわけ社会科学における隣接諸分野との対比や、社会学の始まりをどこに見るかという点も含めて——をどう考えるかに関連して、「社会理論」と「社会学理論」、「社会思想」と「社会学(的)思想」の関係についても数多の議論がある。以上の点について、『テンニース研究』の飯田哲也による以下の記述も参照のこと。「社会学の性格に直接に結びつくという意味で、多様な混沌とも見える社会学の史的展開および現代社会学の動向を整理して把握するための導きの糸となり得るし、したがってこれからの社会学に見通しを与え得る視点こそが社会学思想なのである。これまで「社会学説史」がしばしば書かれていても、「社会学史」がほとんど書かれていないということは、社会学説を検討する視点が必ずしも定かではなかった、あるいは社会学に見通しを与える視点ではなかったがためである」（飯田 1991: 112, 傍点引用者）。

定の概念や命題へと分解し、そうして抽出された概念や命題の水準で諸理論・諸学説を比較分析することもできる。したがって理論学説を対象とする学説史アプローチは、その研究対象をより分析的ないしより統合的な水準で捉えることで、それぞれの方向にさらに分化させることができる。

したがってロバート・A・ニスベットによる『社会学的伝統』(Nisbet 1966=1975)は、上述のようにアーサー・O・ラヴジョイのヒストリー・オブ・アイデアズのアプローチを参照しつつ、思想史の三つの出発点として、

- (1) 人物 (思想家個人)
- (2) 体系・学派・主義
- (3) (体系の要素をなす) 諸理念

を挙げている。なおかつ、各アプローチそれぞれに利点があるとしながらも、(1)は思想史を思想の伝記に変えてしまい、(2)は異なる体系どうしを相互に排他的で還元不可能と捉えてしまう傾向があることから、異なる人物や体系、学派のあいだであっても一定の関連性や連続性をもつ理念に焦点を当てるアプローチを、ニスベットは採用している²⁴。特にニスベットはラヴジョイの『存在の大きいなる連鎖』(Lovejoy 1936 = 2013)から、思想の体系を構成する「単位理念 (unit idea)」²⁵という考えを導入する。つまり社会学の諸体系を構成してきたと

24 ニスベットは批判の対象としているが、(1)人物のみならず、(2)体系・学派・主義に焦点を当てる学説史研究も、社会学史のなかでむしろオーソドックスなものであった。例えばタルコット・パーソンズ『社会的行為の構造』における功利主義と実証主義、観念論と实在論の伝統、あるいはランドル・コリンズ『四つの社会学的伝統』(Collins [1985] 1994=1997)における紛争理論、功利主義・合理的選択理論、デュルケム理論、マイクロ相互作用論の伝統、またレイモン・アロン『現代ドイツ社会学』(Aron [1935] 1953=1956)における体系的社会学と歴史的社会学の伝統、などを挙げることができる。なおアロンは同書の序論で、当時のドイツで社会学の起源をめぐって論じられた19世紀の「百科全書的社会学」と20世紀の「分析的社会学」の区別にも言及している。

25 本稿ではさしあたり、この文脈での“idea”を「理念」と訳しておく(邦訳では「観念」も用いられている)。

いう五つの「単位理念」と、それと対をなして相互に意義を規定する「対理念」として、「共同体-社会」「権威-権力」「地位-階級」「聖なるもの-俗なるもの」「疎外-進歩」を挙げ、これらの単位理念と対理念の組み合わせをもとに、学説史的な社会学史の記述をおこなっている (Nisbet 1966: 3-7=1976: 1-6)。

しかしニスベットは別のところで、文化の面から見ると人間の「環境」には (1) 「諸理念 (ideas)」からなる「知的なもの (the intellectual)」と、(2) 「役割、地位、規範」などからなる「制度的なもの (the institutional)」の二つがあり、どちらも重要かつ不可分であるが、両者は弁別すべきものであり、自身は「知的なもの」を構成する「理念」と「理念の体系」を主な研究対象としてきた、と述べていた (Nisbet 1968: 34)。この説明からは上述『社会学的伝統』の (1) 人物、(2) 体系、(3) 理念の区別ではなく、(1) 人物、(2) 理念、(3) 制度という別の区別が想起される。

また「制度」という「環境」に関して言えば、そのニスベットや、あるいは同時期に『社会学的思想の主要潮流』を記したレイモン・アロン (Aron 1965-1967=1974-1984)²⁶が、社会学の成立に寄与した人物とその学説、あるいはそこで提起されている理念を、とりわけ産業革命と市民革命という『革命の時代』(Hobsbawm 1962=1968) や20世紀転換期の時代に位置づけて論じていたように、政治体制や経済状況を含むより大きな社会環境を挙げることができる。

そして以上のニスベットやアロンらによる著名な研究を含めて、従来の社会学史の方法論を分類する試みとして、ドイツ・オーストリア社会学史研究者のクリスティアン・フレックは、(1) 研究対象の単位と、(2) 研究の視点・観点に大別

26 レイモン・アロンの同書は、ソルボンヌ大学での講義に基づく講義録では『社会学史における偉大な諸学説』(*Les grandes doctrines de l'histoire sociologique*)、その後刊行された英語版で『社会学的思想の主要潮流』(*Main Currents in Sociological Thought*)、さらに続いて刊行されたフランス語版で『社会学的思想の諸段階』(*Les étapes de la pensée sociologique*) と三度に渡ってタイトルが変わっており、それぞれ学説史に対する異なる視点を見出しうる含意がある (なお、以上のようなタイトルの含意をなるべく反映することを念頭に、本稿では文献によって既存の邦訳の訳題を用いていない)。

したうえで、それぞれ以下のような分類をおこなっている (Fleck 2015: 43)。

(1) 研究対象の単位：

- ①アクター (人物、教師-学生関係、集団、学派、地域、国)
- ②理 念 (概念、知識、意味論、理論、体系、流派、主義)²⁷
- ③装 置 (社会調査の方法・技術・道具、統計分析の方法・技術・道具、複製技術)
- ④制 度 (大学、学部、研究グループ、研究所、アカデミー、学会、学術誌、叢書)
- ⑤環 境 (学術以外の社会の諸領域、例：政治体制)

(2) 研究の視点・観点：

- a) どのような集合水準で記述しているか
- b) どのような概念、理論、モデルを用いているか
- c) 個別具体的な研究事例を超えて活用しうる、どのような主導的な問題設定、分析視点を用いているか

まず、(1) 研究対象の単位に関して、①アクターと②理念は、先の佐藤やニスベットの分類におおむね当てはまる。そしていわばそのアクターと理念とのあいだで新たに区分けされているのが、③装置である。佐藤が述べたように、既存の社会学史の主流は学説史アプローチにあり、フレックの分類で言えば主にアクターと理念の組み合わせによって記述されてきたと思われる一方で、それに比すると装置にはさして注目が集められてこなかった (Fleck 2015: 72)²⁸。

²⁷ フレック (Fleck 2015: 69) は、理念を対象とする社会学史の論考はニスベットも含めて、アクター以上に歴史的時代へ言及するものが多いとして、そこにラヴジョイらのヒストリー・オブ・アイデアズや概念史研究の影響を見てとっている。

²⁸ これは必ずしも社会学史に限った話ではなく、科学哲学者のイアン・ハッキングがトマス・クーン『科学革命の構造』の50周年記念版に寄せた序文のなかで、研究には理論、実験、装置という三つのおおよそ互いに独立した伝統があるととした科学史家ピーター・ギャリソンの『いかにして実験は終わるのか』(Galison 1987: 特に6-19など) の見解を引

とはいえ、まさに装置に焦点を当てる研究として、社会調査史研究にもすでに一定の蓄積がある²⁹。さらにフレックは、佐藤の分類で言う制度史アプローチの対象を、この専門分野の内外で区分し、それぞれ④制度、⑤環境としている。制度を焦点とする近年の例としては、社会学専門誌史がある³⁰。また環境に焦点を当てたものとして、フレックはドイツにおけるナチ党の政権掌握や、旧東側諸国の体制転換、さらに現代の新自由主義や監査文化における社会学に関する研究を例に挙げている。他にも社会学史の展開をそうした政治体制を含む社会環境と結びつけて論じる研究は、上述のニスベットやアロンしかり、産業革命と市民革命、世界恐慌、世界大戦、学生運動、高度経済成長等々のより大きな社会変動に、しばしば着目している³¹。

そして(2)研究の視点・観点に関して、a)記述に用いる集合水準の違いは、研究対象の①アクターから⑤環境に至るまで、各対象領域でより小さな単位からより大きな単位まで想定することができる。そこでは地域区分や時代区分の

いたうえで、クーンのこの著作には実験と装置に関する論考が抜け落ちていることを指摘している(Hacking 2012: xvi=2023: xvi; cf. Galison 1987: 8-9)。それを踏まえてむしろ、クーン以降に科学史や科学人類学、科学社会学等の分野でその後発展したのがまさに実験と装置に関する研究——例えば、ブリュノ・ラトゥールらの『実験室の生活』——であった、と言えるかもしれない。ところでギャリソンは同書で、クーンの『科学革命の構造』に影響を与えたウィーン学団のカルナップらについて、「論理経験主義(logical empiricism, logischer Empirismus)」を標榜しながら理論と論理学に偏重し、「皮肉」にも「実験」を軽視した(かつ、クーンもそれを引き継いでいる)と指摘しているが(Galison 1987: 8)、その反対に「経験」と「実験」が結びつくというのも、当然ながら一定の予断がある。同じことは社会学における経験的研究と社会調査との関係についても言える。

29 例えば、Lazarsfeld (1962=1984)、Obershall編 (1972)、Schad (1972=1987)、Easthope (1974=1982)、川合編 (1989-1994)、村上 (2005)、佐藤 (2011)を参照のこと。

30 例えば『アメリカ社会学雑誌』(AJS)と『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(KZfSS)の歴史について、それぞれAbott (1999=2011)、Moebius (2017=2018/2019)を参照のこと。また①アクターと④制度にまたがる研究として、「人脈」というネットワークに焦点を当てる山岡 (1983)による『人脈社会学』の試みがある。また山岡はそうしたアプローチの先駆として、ガブリエル・タルドの名前を挙げている。

31 人物に焦点を当てたうえで時代の文脈に位置づける議論として、例えば奥井智之による以下の記述を参照のこと。「社会学史における理論的な突破はさしあたり、個々の社会学者によって担われる。もちろん社会学者も、時代の子である。社会学者が時代と無関係に、社会理論を構築するわけではない。時代がかれまたはかの女に、社会理論を構築させるという一面もあるのであろう。しかし時代は、社会学者の伝記のなかに浮かび上がってくる。本書で伝記的事実の記述に紙数を割いたのは、そのためである」(奥井2010: 281)。

採否と範囲の相違も見出しうる³²。またb)記述に用いる概念、理論、モデルと、c)問題設定、分析視点は不可分のものであり、それぞれの研究対象の歴史的な変化のみならず、各要素のあいだの関係、とりわけ影響関係や対立関係を適切に扱おうとする枠組みが求められている。

加えてフレックは、社会学史の個別の論考を評価する複数の観点として、(1)歴史的な深さ(歴史的な付置連関をどこまで深く辿るのか)、(2)社会的な内容(いかなる意味で「社会的」な社会学史であるのか)、(3)記述を支える素材やデータの質、(4)体系的・明示的な一般化可能性、を挙げている(Fleck 2015: 44)。

最後にドイツ社会学史研究者からもう一人、ロタル・ペーターが提起した社会学史を構成する三つの主要な次元を挙げておく(Peter 2015: 119)。

(1) 認知的次元：

水準①：社会学、歴史学、科学史

水準②：パラダイム、理論、方法、調査研究

(2) 社会的次元：

水準①：アクター(人物、集団、学派)

水準②：制度化

(3) 言説史的・作用史的次元：

32 時代区分の一例として、Kruse ([2008] 2012) は年号を用いて①1820-90、②1890-1933、③1933-50、④1950-75、⑤1975-という区分を採用し、Rosaほか ([2007] 2013) は近代化の段階をもとに①初期近代、②高度近代(entwickelte Moderne)、③後期近代という区分を採用している。ちなみにそのハルトムート・ローザらは、その時代区分のそれぞれに近代化の四契機としての①合理化、②個人化、③分化、④自然の飼い慣らしの各契機を中心的な主題とした学説を定めている。あるいは日本語の社会学史の古典的研究から例を挙げておくと、新明(1954)は、①社会学の近代的起源(18世紀まで)、②古典的社会学の成立(19世紀のコント、スペンサー、ドイツの社会学説)、③社会学の世界的発展(1870年代～1910年代)、④現代社会学(1920年代以降)を区分し、③以降で国別にイギリス社会学、フランス社会学、ドイツ社会学、イタリア社会学、ロシア社会学、アメリカ社会学、日本社会学について記述している。なお、世界的な「社会学史」史、あるいは日本語の「社会学史」史といったものがもしありうるとすれば、豊富な記述と参照先、個人的発展をとまなう新明の社会学史は、その恰好の素材となりうると考えられる。

水準①：言説史

水準②：作用史

ペーターはこの三つの次元どうしと、さらには社会とのあいだで、相互に結びつき作用しあう関係があると捉えている。上述のフレックの分類で言えば研究の視点・観点に相当する認知的水準では、社会学史を記述するうえで依拠しうるディシプリンとして、社会学に加えて、歴史学と科学史が挙げられている。また研究対象の水準では社会的次元と、言説史的・作用史的次元とに大別したうえで、さらに作用史を社会学という研究分野の内部での影響作用を問う研究と、社会学と社会との関係のなかでの影響作用を問う研究とに区分している（Peter 2015: 139-140）。

おわりに——問題史としての社会学史の可能性

これまで見てきた方法論的な議論の要点をまとめて言えば、社会学史の焦点を人物に当てる場合にせよ、あるいは理論学説を概念や理念にまで分解する場合にせよ、いずれにしても人物であれ理論学説であれ概念や理念であれ、それぞれ単独で社会や社会学のなかで現われ出てくることはありえず、それぞれ水準やより集合的な水準での付置連関のなかで、かつ一定の外部環境をともなって現われ出てくるものである。いかなる概念や学説であっても、それを提唱した人物やその人物が生きた時代や社会といった外部環境との関わりのみならず、概念どうしや学説どうしの関わり、諸概念や諸学説の付置連関のなかで、その概念や学説に特有の意義が与えられている。

したがって、学説史を旨とする社会学史にあっては、何らかの理念や概念、理論や学説を、どのような文脈、どのような付置連関のもとで論じるのか、が重要な問題となる。その問題に応じたのが、ラヴジョイの構想を引き継いだニズベットによる単位理念という枠組みでもあった。

そしてこれまでの社会学史研究のなかで言えば、諸概念や諸学説を一定の文

脈のもとで論じるより大きな枠組みとして、問題史の構想がある。

一例として、ニクラス・ルーマンは「社会秩序はいかにして可能か」という論考の冒頭で、このように記している。

以下の論考の理論的関心の中心部に位置するのは、「[社会秩序はいかにして可能か] という」一つの問題設定である。かねてより、当の問題こそが科学の一分野としての社会学を構成するのだと言われてきた。この問題設定そのものが、[社会学の] 諸理論への取り組みの長期にわたる過程のなかで発展してきたのであり、ある理論を十分に理解するためにはそれを導いている問題を知ることが前提となるという点において、この問題設定は当の理論の一部なのである (Luhmann 1981: 195=2013: 211)。

ここでルーマンは、社会学という名称や、社会という対象概念ではなく、「社会秩序はいかにして可能か」という一つの問題設定こそが、諸学問のなかでの学問分野が分出するのに寄与したと考えており、社会という問題の共有こそが、社会学という学問分野の統一性を成り立たせている、と考えている。

ルーマンが提示したこのような問題論的アプローチは、社会学のみならず社会科学一般、あるいは科学一般の下位分野すべてに対して当てはめて考えることができるが、そうした構想の先駆として、ルーマン自身が科学全体の歴史における科学的認識論の発展のなかで画期をなした人物の一人に挙げるカール・R・ポパーは、1960年代のドイツ社会学会／界で生じた「実証主義論争」³³と後

33 ここで詳しく論じることはできないが、学説史的なアプローチのうち、問題史と関わるもう一つのアプローチとして、論争史の構想がある。つまり社会学の諸概念や諸学説の付置連関を構成する一つの契機として論争を捉え、そこで対峙する諸学説や諸概念、あるいは諸アクターをも記述してゆくアプローチである。例えば、論争なき学界よりも論争ある学界のほうが活況を呈する可能性、論争の結果として非主流となった学説も論争の形式で保存されることで未来に再利用される可能性、といった注目点を挙げることができる。そうした論争史の構想には、社会学のなかではSimmel ([1908] 1923=2016) や Coser (1956=1978) のコンフリクト理論が示唆を与えており、ドイツ語圏では例えば Kneer und Moebius (2010) の試みがある。

に呼ばれる論争の発端となった論考の一つ「社会科学の論理」のなかで、以下のように定式化していた。

およそ学問とか認識がどこかで始まるといえるとするれば、次のようにいえよう。すなわち、認識は知覚や経験、あるいは資料や事実の収集と共に始まるのではなく、問題と共に始まる、と。……社会科学の方法は、自然科学の場合と同様、問題——研究がそこから出発する問題——のための解決の試みを吟味精査する点にある」(Popper [1961] 1969: 104-105=[1979] 1992: 110-112)。

さらにルーマンは、「社会秩序はいかにして可能か」という問題設定を理論化した重要な先駆者として、タルコット・パーソンズ『社会的行為の構造』(Parsons [1937] 1949=1976-1989)における「秩序問題」と、ゲオルク・ジンメル『社会学』(Simmel ([1908] 1923=2016)における「社会はいかにして可能かについての補説」を挙げているが、そのようにして学史上で「古典」「古典的著述家(Klassiker)」として取り上げられる学説と人物について、以下のように記している。

社会学はその発展の最新の、目下のところ最後の位相において、独自の理論的伝統に反応し始めている。自分自身を、問題の歴史から生じる要求(problemgeschichtliche Anforderungen)に晒そうとしているのである。社会学は、後からの創造という道筋によって、《古典的著述家(Klassiker)》を手に入れる。それは人格化によって切り縮められ、短縮された過去なのである。今日から見れば、その種の古典的著述家が提示する問題解決は、妥当な理論的認識としては放棄されるに至っている。しかしその問題設定のほうはいまだ現時的アクチュアルなのである。だとすれば古典的著述家を回顧することによって、問題設定と理論との間の差異が拡大していだろう。古典の

問題解決を継承しなくても、その問題設定のほうだけ継承するということすらできるはずだからである。(Luhmann 1981: 258-259=2013: 293)

したがってルーマンや彼が挙げる論者らは、〈社会（秩序）はいかにして可能か〉という問いに取り組むなかで、既存のさまざまな回答を検討し、批判し、また新たに問い直すということを繰り返すことによって、そのまま〈社会学はいかにして可能か〉というこの学問分野の可能性についての問いにも取り組んでいる。とりわけパーソンズやルーマンの研究においては、それがひいては〈社会学史はいかにして可能か〉という問いにも結びつけられており、いわば問題史的アプローチから³⁴、一定の回答を提示している³⁵。ただし、アンソニー・ギデンズ(Giddens 1976: 716-722)も指摘しているように、当然ながら「秩序問題」が「社会学の唯一の問題」であるとは限らず、社会学の成立に寄与した先行する諸学説のどこに画期を見るかも、さまざまな可能性がある。そのギデンズ自身は、マルクスとエンゲルスらのそれを含む「産業社会の理論」に社会学の成

34 問題史的アプローチによる社会学史に関して、ポパー著の邦訳を複数刊行している森博が、前述のポパーの著作や、あるいはフライヤー(Freyer 1930: 4=1944: 6)の「これまでの社会学の歴史は、その大部分が社会学それ自体を問題とする歴史であった……」という一節を引きながら、このように記している。「もともと、すべての科学はポパーが反復強調しているように、「問題とともにのみ始まり、問題とともに前進し、自己を形成する」ものであり、したがって「科学の専門分野とは、問題およびその解決試みの明確に組織された集積以外の何ものでもない」とすれば、社会学の性格規定も、おのずからまた、問題史的な追求によってのみ明らかにしうるものとなろう。そこでまずわれわれは、……学史的な観点に立って、社会学が、その社会学という名のもとに、何を、いかなる視点から、どのように問題としてきたか、を原理的なかたちで究明しつつ、「社会学とは何か」を問いただしてゆこうと思う(森1969: 1)。

35 ルーマンは科学の分出や科学的認識論の発展に寄与した人物としてポパー以外にカントにも言及しているが、さらにジンメル「社会はいかにして可能か」の問いも、他ならぬカントによる認識の可能性条件をめぐる「いかにして可能か」の問いを発展させたものである。そしてルーマン以前にもレオポルト・フォン・ヴィーゼやフライヤーなどが、ジンメルやカントの名と結びつけて「社会学はいかにして可能か(Wie ist soziologische Wissenschaft möglich?)」(von Wiese 1926: 10=1928: 11-12)、「……社会学はいかにして「可能か」という問い(die Frage: wie ... Soziologie „möglich sei“)」(Freyer 1930: 3)を踏まえて一定の社会学史の構想を提示しており、ルーマンのその論考もそうした一連の流れのうえに位置づけることができる。

立基盤を見ている。そして社会学が何を問題としてきたのかについては、大小さまざまな水準で考えることができるが、冒頭で述べた〈社会学とは近代社会の自己意識である〉との規定にまさに沿うかたちで、「社会はいかにして可能か」に加えて、「近代とはいかなる時代か」(cf. Giddens 1990=1993)という問いも、社会学にとって重要な、今日に続く問いの一つである³⁶。またギデنز は『社会理論の主要問題』のなかでパーソンズの『社会的行為の構造』をあえて引きつつ、既存の「正統派の社会学 (orthodox sociology)」に欠けていたのはむしろ「行為の理論」であると訴えていたが (Giddens 1979: 253-254=1989: 275-276)、いわば「社会的行為はいかにして可能か」という問いもまた、分野内外の理論展開を踏まえながら、社会学のなかで連続と問われてきた問いである³⁷。

本稿の冒頭で述べた、社会学が社会と取り結んでいる再帰的關係により、社会の問題、とりわけ社会における諸問題というよりも、社会という問題そのものが、社会学の問題となってきた³⁸。そして社会という問題の発見とそれに対する回

36 ここには後期近代化や再帰的近代化など、いわゆる「第二の近代化」論や、「グローバル化とは何か」(cf. Beck 1997=2005)を問うグローバル化論——グローカル化、コスモポリタン化等々——など、さまざまな展開や亜種を認めうる。また例えば、マックス・ウェーバーらの近代資本主義の西洋的起源に関する議論に含まれるような、近代化の核心を問う議論や、さらにそうした議論に対するポストコロニアリズム理論からの見直し、といった展開もある。

37 ギデنزも同書を、解釈学や言語哲学の発展を踏まえて、以下のように締めくくっている。「われわれは社会理論の現代的位相のもとで二つの回転軸の同時的な動きのなかに組み込まれている。これが私の言い分である。ひとつの軸は人間の社会活動の性格にかんする理解の軸であり、もうひとつは自然科学の論理形式にかんする軸である。これら両者はまったく別個の努力ではなくて、共通の問題源泉 (a pool of common problems) から出てきたものである。というのは、自然科学の哲学的理解にとって解釈学の問題が不可欠なことが明らかになったのと同様に、因果分析を排除する社会科学の概念の限界も明らかだからである。われわれは自然科学と社会科学を二つの独立した知的努力の産物として扱うことはできない。それらの特徴が別個に決定され、そしてつぎに両者が統一され互いに比較されるというものではないのである。哲学者や社会学者は自然科学の進歩に注意を払い続けなければならないし、自然科学の哲学の方でも社会理論の問題にたいしてしっかりと注意を払う必要がある」(Giddens 1979: 259=1989: 281)。

38 例えば、奥村 (2014)、厚東 (2020) なども参照のこと。

答の提示、さらには既存の回答の棄却や新たな問題設定こそが社会学の成立や発展を促してきたのだとすれば、今日社会学史の課題もまた、つねに別様の可能性がありえたという認識のもとでの、社会という問題をめぐるこれまでの問題設定と回答提示の探究と、これからのその可能性の追究であるだろう。

文献

- Aron, Raymond, [1935] 1953, *Die deutsche Soziologie der Gegenwart*, übersetzt und bearbeitet von Iring Fetscher, Stuttgart: A. Kröner [Originally published in French in 1935, *La sociologie allemande contemporaine*, Paris: Felix Alcan; 1950, 2e éd, Paris: Presses Universitaires de France]. (= 1956, 秋元律郎・河原宏・芳仲和夫訳『現代ドイツ社会学』理想社.)
- Aron, Raymond, 1965-1967, *Main Currents in Sociological Thought*, Vol.1-2, translated by Richard Howard and Helen Weaver, New York: Basic Books [French version published in 1960-1962, *Les grandes doctrines de sociologie historique*, T. I-II, Paris: Centre de Documentation Universitaire; 1967, *Les étapes de la pensée sociologique: Montesquieu, Comte, Marx, Tocqueville, Durkheim, Pareto, Weber*, Paris: Gallimard]. (= 1974-1984, 北川隆吉ほか訳, 『社会学的思考の流れ』I・II, 法政大学出版局.)
- 阿閉吉男, 1952, 「社会学史の課題と方法」阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史』[新版1957『社会学史概論』勁草書房]学苑社, 1-7.
- 阿閉吉男・内藤莞爾, 1952, 「序」阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史』[新版1957『社会学史概論』勁草書房]学苑社, I-II.
- Beck, Ulrich, 1997, *Was ist Globalisierung? Irrtümer des Globalismus - Antworten auf Globalisierung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2005, 木村利秋・中村健吾監訳『グローバル化の社会学——グローバリズムの誤謬——グローバル化への応答』国文社.)
- Bhabra, Gurinder, 2007, *Rethinking Modernity: Postcolonialism and the Sociological Imagination*, Basingstoke: Palgrave Macmillan. (= 2013, 金友子訳, 『社会学的想像力の再検討——連なりあう歴史記述のために』岩波書店.)
- Carr, Edward Hallett, [1961] 1987, *What is History?: The George Macaulay Trevelyan Lectures Delivered in the University of Cambridge January-March 1961*, edited by R. W. Davies, 2nd ed., Harmondsworth: Penguin. (= 2022, 近藤和彦訳『歴史とは何か』新版, 岩波書店.)
- Cerulo, Massimo and Adrian Scribano (eds.), 2022, *The Emotions in the Classics of*

- Sociology: A Study in Social Theory*, London and New York: Routledge.
- Collins, Randall, [1985] 1994, *Four Sociological Traditions*, rev. and expanded ed., New York: Oxford University Press. (= 1997, 友枝敏雄訳者代表『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』有斐閣.)
- 廳茂, 2010, 「G・ジンメルにおける「社会はいかにして可能か」——第3アプリアリ論の思想的意味(上)」『国際文化学研究——神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』35: 1-32, (2023年10月30日最終閲覧, <https://doi.org/10.24546/81002673>)
- Coser, Lewis A., 1956, *The Functions of Social Conflict*, London: Routledge & Kegan Paul. (= 1978, 新睦人訳『社会闘争の機能』新曜社.)
- Croce, Benedetto, [1917] 1920, *Teoria e storia della storiografia*, 2a ed. riv., Filosofia come scienza dello spirito, IV, Bari: Laterza. (= 1952, 羽仁五郎訳『歴史の理論と歴史』岩波書店.)
- Dayé, Christian, und Stephan Moebius, 2015, »Einleitung«, Christian Dayé und Stephan Moebius (Hg.), *Soziologiegeschichte: Wege und Ziele*, Berlin: Suhrkamp, 7-19.
- Easthope, Gary, 1974, *A History of Social Research Methods*, London: Longman. (= 1982, 川合隆男・霜野寿亮監訳『社会調査方法史』慶應通信.)
- Eisenstadt, Shmuel N., 2000, "Multiple Modernities," *Daedalus: Journal of the American Academy of Arts and Sciences*, 129 (1) : 1-29, (2023年10月31日最終閲覧, <https://www.jstor.org/stable/20027613>)
- Fleck, Christian, 1999, »Für eine soziologische Geschichte der Soziologie«, *Österreichische Zeitschrift für Soziologie*, 24 (2) : 52-65, (2023年10月31日最終閲覧, <https://nbn-resolving.org/urn:nbn:de:0168-ssoar-234930>)
- Fleck, Christian, 2015, »Skizze einer Methodologie der Geschichte der Soziologie: Zur Einleitung mehr als ein Caveat«, Christian Dayé und Stephan Moebius (Hg.), *Soziologiegeschichte: Wege und Ziele*, Berlin: Suhrkamp, 34-111.
- 船津衛編, 2006, 『感情社会学の展開』北樹出版.
- Freyer, Hans, 1930, *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft: Logische Grundlegung des Systems der Soziologie*, Leipzig und Berlin: B. G. Teubner. (= 1944, 福武直譯『現實科学としての社会学』日光書院.)
- Freyer, Hans, 1931a, *Einleitung in die Soziologie*, Leipzig: Quelle & Mayer. (= [1942] 1952, 阿閉吉男譯『社会学入門』学苑社 [旧版: 1942, 阿閉吉男・那須宗一共譯, 慶應書房].)
- Freyer, Hans, 1931b, *Revolution von rechts*, Jena: Eugen Diederichs Verlag.
- Freyer, Hans, 1935, »Gegenwartsausgaben der deutschen Soziologie«, *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 95 (1) : 116-144.
- 古川安, [1989] 2018, 『科学の社会学史——ルネサンスから20世紀まで』ちくま学芸文庫

版, 筑摩書房 [初版1989, 増訂版2000, 南窓社].

- Galison, Peter 1987, *How Experiments End*, Chicago, Illinois: The University of Chicago Press.
- Geiger, Theodor, 1931, »Soziologie: I. Hauptrichtungen, Aufgaben, Verfahren«, Alfred Vierkandt (Hg.), *Handwörterbuch der Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke Verlag, 568-578. (= 2021, 梅村麦生訳「社会学—主要潮流、課題、手法 (I)」『研究紀要』日本大学文理学部人文科学研究所, 101: 27-41, <https://doi.org/10.15006/chs20101101002>, 2023年10月10日最終閲覧; 2020, 梅村麦生訳「社会学—主要潮流、課題、手法 (II)」『社会学論叢』日本大学社会学会, 199: 49-76, <http://socio.sakura.ne.jp/199umemura.pdf>, 2023年10月10日最終閲覧.)
- Giddens, Anthony, 1976, "Classical Social Theory and the Origins of Modern Sociology," *American Journal of Sociology*, 81 (4) : 703-729.
- Giddens, Anthony, 1979, *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press. (= 1989, 友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳, 『社会学理論の最前線』ハーベスト社.)
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity Press. (= 1993, 松尾精文・小幡正敏訳, 『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結』而立書房.)
- Hacking, Ian, 2012, "Introductory Essay," Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, with an Introductory Essay by Ian Hacking, 4th ed., Chicago, Illinois and London: The University of Chicago Press, vii-xxxii. (= 2023, 青木薫訳「序説——五十周年記念版に寄せて」『科学革命の構造』新版, イアン・ハッキング序説, みすず書房, i-li.)
- Hobsbawm, Eric J., 1962, *The Age of Revolution: Europe 1789-1848*, London: George Weidenfeld and Nicolson. (= 1968, 安田悦子・水田洋『市民革命と産業革命——二重革命の時代』岩波書店.)
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, [1837] 1928, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Sämtliche Werke*, Bd.11, herausgegeben von Hermann Glockner, Stuttgart: Fr. Frommann. (= 1994, 長谷川宏訳『歴史哲学講義』上・下, 岩波書店.)
- 五十嵐信, 1928, 「獨塊社會學」『大思想エンサイクロペヂア13 社會學』春秋社, 175-219.
- 飯田哲也, 1991, 『テンニース研究——現代社会学の源流』ミネルヴァ書房.
- 稲葉振一郎, 2009, 『社会学入門——〈多元化する時代〉をどう捉えるか』日本放送出版協会.
- 磯直樹, 2020, 『認識と反省性——ピエール・ブルデューの社会学的思考』法政大学出版局.
- 川合隆男編, 1989/1991/1994, 『近代日本社会調査史』1~3巻, 慶應義塾大学出版会.
- Klingemann, Carsten, 2020, *Soziologie im Deutschland der Weimarer Republik, des*

- Nationalsozialismus und der Nachkriegszeit: Der schwierige Umgang mit einer politisch-ideologisch belasteten Entwicklungsphase*, Wiesbaden: Springer VS.
- Koselleck, Reinhart, 1979, *Vergangene Zukunft : zur Semantik geschichtlicher Zeiten*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 厚東洋輔, 2020, 『<社会的なもの>の歴史——社会学の興亡1848-2000』東京大学出版会.
- Kneer, Georg, und Stephan Moebius (Hg.), 2010, *Soziologische Kontroversen: Beiträge zu einer anderen Geschichte der Wissenschaft von Sozialen*, Berlin: Suhrkamp.
- Kruse, Volker, [2008] 2012, *Geschichte der Soziologie*, 2. Aufl., Konstanz: UVK.
- Kuhn, Thomas, 1962, *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1971, 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房.)
- Latour, Bruno, [1984] 2001, *Pasteur: guerre et paix des microbes, suivi de Irréductions*, Paris: La Découverte [Initialement publié en 1984 sous le titre *Les Microbes: guerre et paix, suivi de Irréductions*, Paris: Anne-Marie Métalié]. (= 2023, 荒金直人訳『パストゥール——あるいは微生物の戦争と平和、ならびに「非還元」』以文社.)
- Lazarsfeld, Paul F., 1962, "The Sociology of Empirical Social Research," *American Sociological Review*, 27 (6) : 757-767. (= 1984, 西田春彦・高坂健次・奥川櫻豊彦訳『経験的社会調査の社会学』『質的分析法——社会学論集』岩波書店, 328-354.)
- Lepenies, Wolf, 1981, »Einleitung: Studien zur kognitiven, sozialen und historischen Identität der Soziologie«, Wolf Lepenies (Hg.), *Geschichte der Soziologie: Studien zur kognitiven, sozialen und historischen Identität einer Disziplin*, Bd.1, Frankfurt am Main: Suhrkamp, I-XXXV.
- Lepsius, M. Rainer (Hg.), 1981, *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945: Materialien zur Entwicklung, Emigration und Wirkungsgeschichte*, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 23, Opladen: Westdeutscher.
- Lovejoy, Arthur O., 1936, *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (= [1975] 2013, 内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』高山宏補訳・解説, ちくま学芸文庫版, 筑摩書房 [初版1975, 晶文社].)
- Luhmann, Niklas, 1981, »Wie ist soziale Ordnung möglich?«, *Gesellschaftsstruktur und Semantik : Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft*, Bd.2, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 195-285. (= 2013, 馬場靖雄訳「社会秩序はいかにして可能となるか」馬場靖雄・赤堀三郎・毛利康俊・山名淳訳『社会構造とゼマンティック』2, 法政大学出版局, 211-327.)
- Marx, Karl und Friedrich Engels, [1848] 1932, *Das kommunistische Manifest*,

- Gesamtausgabe*, 1. Abt., Bd.6, Berlin: Marx-Engels-Verlag. (= 1951, 大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波書店.)
- Mannheim, Karl, 1931, »Wissenssoziologie«, Alfred Vierkandt (Hg.), *Handwörterbuch der Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke Verlag, 659-680. (= 1969, 森博訳「知識社会学」『歴史主義・保守主義』厚生社恒星閣, 199-259.)
- Mannheim, Karl, 1934, "German Sociology (1918-1933)," *Politica*, 1 (1) : 12-33. (= 1976, 朝倉恵俊訳「ドイツにおける社会学の問題論」樺俊雄監修『マンハイム全集3 社会学の課題』潮出版社, 269-329.)
- Merton, Robert K., 1949, "Discussion," a paper discussing "The Position of Sociological Theory" by Talcott Parsons, *Ameriacan Sociological Review*, 13 (2) : 164-168.
- Merton, Robert K., [1949] 1957, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, rev. and enl. ed., Glencoe, Illinois and New York: The Free Press. (= 1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- Merton, Robert K., 1967, "On History and Systematics of Sociological Theory," *On Theoretical Sociology: Five Essays, Old and New*, including part one of Social Theory and Social Structure, New York: The Free Press, 1-37.
- 宮武実知子, 2001, 「「現実科学」の理念と困難——ハンス・フライヤーの社会学について」『哲學研究』572: 108-130, (2023年10月26日最終閲覧, https://doi.org/10.14989/JPS_572_108.)
- Moebius, Stephan, 2017, »Die Geschichte der Soziologie im Spiegel der *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* (KZfSS)«, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 69 (1 Supplement) [Sonderheft 56] : 3-44, (2023年10月10日最終閲覧, <https://doi.org/10.1007/s11577-017-0433-6> = 2018, 梅村麦生訳「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(KZfSS)にみる社会学の歴史(上)」『京都社会学年報』26: 123-147, 2023年10月10日最終閲覧, <http://hdl.handle.net/2433/237340>; 2019, 梅村麦生訳「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(KZfSS)にみる社会学の歴史(下)」『京都社会学年報』27: 119-148, 2023年10月10日最終閲覧, <http://hdl.handle.net/2433/246422>.)
- メビウス, シュテファン, 2021, 「二〇〇〇年以降のドイツ語圏諸国における社会学史」高井艸賢・出口剛司訳, 『社会学史研究』43: 59-79.
- Moebius, Stephan und Andrea Ploder, 2018, »Einführung in das Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie«, Stephan Moebius und Andrea Ploder (Hg.), 2018, *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie, Band 1: Geschichte der Soziologie im deutschsprachigen Raum*, Wiesbaden, Springer VS, 1-8.
- Moebius, Stephan und Andrea Ploder (Hg.), 2018, *Handbuch Geschichte der*

deutschsprachigen Soziologie, Band 1: Geschichte der Soziologie im deutschsprachigen Raum, Wiesbaden, Springer VS.

- 森博, 1969, 『社会学的分析』 恒星社厚生閣.
- 森川剛光, 2020, 「マルチパラダイムの終焉? ——社会学アカデミー分離独立問題からみるグローバル化のドイツ社会学への影響」『社会学史研究』 42: 7-29.
- Morin, Edgar, 1984, »Sociologie de la Sociologie«, *Sociologie*, Paris: Fayard, 27-45 [une communication au Colloque: Les Sociologies II, Paris, Sorbonne, 1984].
- Muller, Jerry Z., 1987, *The Other God that Failed: Hans Freyer and the Deradicalization of German Conservatism*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- 村上文司, 2005, 『近代ドイツ社会調査史研究——経験社会学の生成と脈動』 ミネルヴァ書房.
- Nisbet, Robert A., 1966, *The Sociological Tradition*, New York: Basic Books. (= 1975, 中久郎監訳『社会学的発想の系譜』 I・II, アカデミア出版会.)
- Nisbet, Robert A., 1968, "Sociology as an Idea System," *American Behavioral Scientist*, 12 (1) : 34-37.
- Oberschall, Anthony (ed.), 1972, *The Establishment of Empirical Sociology: Studies in Continuity, Discontinuity, and Institutionalization*, New York: Harper and Row.
- 隠岐さや香, 2018, 『文系と理系はなぜ分かれたのか』 星海社.
- 奥井智之, 2010, 『社会学の歴史』 東京大学出版会.
- 奥村隆, 2014, 『社会学の歴史I——社会という謎の系譜』 有斐閣.
- 奥村隆, 2023, 『社会学の歴史II——他者への想像力のために』 有斐閣.
- 大澤真幸, 2019, 『社会学史』 講談社.
- Parsons, Talcott, [1937] 1968, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, 3rd ed., New York: The Free Press. (= 1976-1989, 稲上毅・厚東洋輔共訳『社会的行為の構造』 1-5, 木鐸社.)
- Peter, Lothar, 2015, »Warum und wie betreibt man Soziologiegeschichte?«, Christian Dayé und Stephan Moebius (Hg.), *Soziologiegeschichte: Wege und Ziele*, Berlin: Suhrkamp, 112-146.
- Plumer, Ken, [2010] 2016, *Sociology: The Basics*, 2nd ed., London and New York: Routledge. (= 2021, 赤川学監訳『21世紀を生きるための社会学の教科書』 筑摩書房.)
- Poferl, Angelika und Reiner Keller, 2017, »Wissenskulturen und Soziologiegeschichte«, Stephan Moebius und Andrea Ploder (Hg.), *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie, Band 2: Forschungsdesign, Theorien und Methoden*, Wiesbaden: Springer VS, 81-98.
- Popper, Karl Raimund, [1950] 1963, *The Open Society and its Enemies, Volume II, The*

社会学史はいかにして可能か——今日におけるその可能性と課題——

High Tide of Prophecy: Hegel, Marx, and the Aftermath, 4th ed., Princeton, New Jersey: Princeton University Press. (= 1980, 小河原誠・内田詔夫訳『開かれた社会とその敵 第二部 予言の大潮——ヘーゲル、マルクスとその余波』未來社。)

Rosa, Hartmut, David Strecker und Andrea Kottmann, [2007] 2013, *Soziologische Theorien*, 2., überarbeitete Auflage, Konstanz: UVK.

Sachsenmaier, Dominic and Jens Riedel (eds.), 2002, *Reflections on Multiple Modernities: European, Chinese and Other Interpretations*, Leiden: Brill.

佐藤健二, 2011, 『社会調査史のリテラシー——方法を読む社会学的想像力』新曜社。

佐藤成基, 2023, 「学説史を通じて「社会学」を問う——大会シンポジウムによせて」『社会学史研究』45: 3-11.

Schad, Susanne Petra, 1972, *Empirical Social Research in Weimar-Germany*, Paris: Mouton. (= 1987, 川合隆男・大淵英雄監訳『ドイツ・ワイマール期の社会調査』慶應通信。)

Schauer, Alexandra, 2018, »Soziologie in Deutschland zur Zeit des Nationalsozialismus«, Stephan Moebius und Andrea Ploder (Hg.), 2018, *Handbuch Geschichte der deutschsprachigen Soziologie, Band 1: Geschichte der Soziologie im deutschsprachigen Raum*, Wiesbaden: Springer VS, 117-148.

Schumpeter, Joseph Alois, 1914, »Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte«, Karl Bücher, Joseph Alois Schumpeter und Friedrich Freiherr von Wieser, *Grundriss der Sozialökonomik: I. Abteilung: Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft*, Tübingen: J.C.B. Mohr, 19-124. (= 1980, 中山伊知郎・東畑精一訳『経済学史——学説ならびに方法の諸段階』岩波書店。)

清水幾太郎, 1933, 『社会学批判序説』理想社。

Simmel, Georg, 1916, *Das Problem der historischen Zeit*, Berlin: Reuther & Reichart. (= [1975] 2004, 川村二郎・山田哲平訳「歴史的時間の問題」『ジンメル著作集10 芸術の哲学』新装復刊, 白水社, 228-253。)

Simmel, Georg, [1892] 1922, *Die Probleme der Geschichtsphilosophie: Eine erkenntnistheoretische Studie*, 4. Aufl., München und Leipzig: Duncker & Humblot. (= [1977] 2004, 生松敬三・亀尾利夫訳『歴史哲学の諸問題』上・下, 新装復刊, 白水社。)

Simmel, Georg, [1908] 1923, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, 3. Aufl., Berlin: Duncker & Humblot. (= [1994] 2016, 居安正訳『社会学——社会化の諸形式についての研究』上・下, 新装復刊, 白水社。)

新明正道, 1926, 「社会学史」大宅壯一編『社会問題講座』第一卷, 新潮社, 1-22.

新明正道, 1932, 『社会学序講』大畑書店。

- 新明正道, 1954, 『社會學史概説』[改版1977], 岩波書店.
- Sorokin, Pitirim A., 1928, *Contemporary Sociological Theories*, New York and London: Harper & Brothers.
- Srubar, Ilija, 2015, »Wozu Geschichte der Soziologie? Die Soziologiegeschichte als historische Wissenssoziologie«, Christian Dayé und Stephan Moebius (Hg.), *Soziologiegeschichte: Wege und Ziele*, Berlin: Suhrkamp, 465-487.
- Turner, Jonathan H. and Jan E. Stets, 2005, *The Sociology of Emotions*, Cambridge, Massachusetts: Cambridge University Press. (= 2013, 正岡寛司訳『感情の社会学理論——社会学理論再考』, ジョナサン・ターナー 感情の社会学V, 明石書店.)
- 梅村麦生, 2020, 「非同時的なものの同時性」『社会学史研究』42: 91-109, (2023年10月27日最終閲覧, <https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008806>)
- Whitehead, Alfred North, 1917, "The Organization of Thought," *The Organization of Thought: Educational and Scientific*, London: Williams and Norgate, 105-133.
- Whitehead, Alfred North, [1929] 1978, *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, Gifford Lectures delivered in the University of Edinburgh during the session 1927-1928, Corrected Edition by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne, New York: The Free Press. (= 1981/1983, 平林康之訳『過程と実在——コスモロジーへの試論』1・2, みすず書房.)
- Wiese, Leopold von, 1926, *Soziologie: Geschichte und Hauptprobleme*, Berlin und Leipzig: Walter de Gruyter. (= 1928, 黒川純一譯註『社會學——歴史及主要問題』刀江書院).
- 山岡栄市, 1983『人脈社会学——戦後日本社会学史』お茶の水書房.

付記

本稿は日本社会学史学会第62回大会シンポジウム「学説史を通じて「社会学」とは何だったのかを問うⅡ——1920～60年代 諸理論パラダイムの形成」(日本大学文理学部、2023年6月25日)で筆者がおこなった討論者コメントをもとに、大幅に加筆・修正を加えたものである。また本稿は、日本学術振興会・科研費助成事業19H01585,22H00904,23K01748の助成を受けた研究成果の一部である。